

読書のすゝめ

その 34

H 31 2 / 5

第17回読み聞かせコンクール入賞！ (朗読部門)

茨城県読書をすすめる協議会長賞

3年 田中杏奈さん 『空が分裂する』 最果タビ

2月2日(土)に茨城県立図書館において「読み聞かせコンクール」が開催され、3年の田中杏奈さんが朗読部門に出場しました。高校生以上の一般の部30名の中で、みごと入賞を果たしました。発表は一人4分間です。

審査のポイントは

- ・発音 ・発声 ・アクセント ・間の取り方
- ・内容を十分に理解し表現できているか
- ・朗読として発表がなされ、自分の声を生かしているか
- ・声に表情を持たせ、内容や状況をうまく表現できているか

田中さんは、昼休みや放課後に図書館や体育館で何度か練習をして本番に臨みましたが、県立図書館のステージでも堂々としており、マイクなしでもよく通る声でした。そして、なにより声に表情がある素晴らしい朗読でした。「参加してよかったです！」と満面の笑みで喜びを語ってくれました。おめでとうございます。



新着図書から

『乙女の文学さんぽ』(鎌倉・湘南)



鎌倉は神社仏閣めぐりだけでなく、川端康成をはじめ多くの文学者が居を構え、夏目漱石『門』、三島由紀夫『豊饒の海 春の雪』などの名作の舞台・モデルとなった近代文学の聖地としても知られています。現代においても小川糸『ツバキ文具店』、三上延『ピブリア古書堂の事件手帖』、漫画でも『海街 Diary』や『鎌倉ものがたり』が描かれています。そんな鎌倉と周辺の湘南を「文学+散策」をテーマに紹介したガイド本です。各地区を代表する名作の舞台や、作品に沿った散策ルート、また、散策の途中で立ち寄りたいカフェや食事処などの休憩スポットや鎌倉みやげなどが紹介されていますので、春休みなどを使って訪れてはいかがでしょうか？

『本と鍵の季節』米澤穂信



堀川次郎は高校二年の図書委員。利用者のほとんどいない放課後の図書室で、同じく図書委員の松倉詩門と当番を務めている。背が高く顔もいい松倉は目立つ存在で、快活でよく笑う一方、ほどよく皮肉屋ないいやつだ。そんなある日、図書委員を引退した先輩女子が訪ねてきた。亡くなった祖父が遺した開かずの金庫、その鍵の番号を探り当ててほしいというのだが…。図書室に持ち込まれる謎に、男子高校生ふたりが挑む全六編。読後の苦みもこの本の良さ…。

『好日日記〜季節のように生きる』森下典子



疲れたら、季節の中に入れば、それでいい。どこかへ行こうとしなくても、日本は季節をめぐっているのだ。私たちは、季節を追い抜いて先へ進むことも、逆らって同じ季節にとどまることもできない。いつも季節の大きなめぐりと共に変化して、一瞬の光や、樹々を吹きすぎた風に心を立て直し、降りしきる雨音に身を任せて自分を癒したりしているのだ。(中略) 私たちは、季節のめぐりの外ではなく、元々、その中にいる。だから、疲れたら流れの中にすべてをあずけていいのだ……(抜粋)。